2009年度 明治学院大学

授業評価報告書

MEIJI GAKUIN UNIVERSITY

＃◇～◆　E先生へのインタビュー　◆～◇＃

良い授業に向けて―私の五原則―

国際学部教授　岡部光明

私が初めて大学の教壇に立ったのは、もう２０年も前のことですがアメリカの大学においてでした。米国の大学では当時から履修者による授業評価が行われており、全科目につきその結果が掲示板に張り出されるという徹底した公開システムが採られていました。この時に直面した大きなプレッシャーがそれ以降、私の授業スタイルを方向づけることになりました。

これまでに私が国内外の大学で担当した科目やそのクラス規模は様々ですが、いずれの場合でも学生が(a)基本概念を確実に理解する、(b)ものごとを整理して考える、(c)書く力と話す力を磨く、ことを達成することが基本だと考えてきました。このため私は授業に関して種々の工夫を凝らし、今ではそれを５つの原則としています。

第１に、授業の冒頭で学生諸君にあいさつの言葉を述べることです。「みなさん、おはようございます。今日は富士山が見事な姿を見せてくれていますね。皆さんを励ましているようです。さて本日の授業は・・・」といった風に季節のことばを述べます。これは学生諸君と私が気持ちを一体化するとともに、勉強モードに切り替えるうえで大切だと考えているからです。

第２に、黒板の左端に当日の講義目次を書く一方、板書を最大限かつ系統的に活用することです。例えば、現在担当している日本経済論の場合、当日のテーマとして「格差問題(1):生活格差と政策課題」とまずチョークで書き、その下に３～５つの見出し項目を番号を付けて書き添えます。この板書は授業ベルが鳴る前に教室に入って行い、講義開始後は話しつつある項目の番号を○で囲んで示すことにしています。これは、当日の講義内容とその構造ならびに進捗状況を明確にするための配慮です。

そして講義は、かなり徹底した板書を基礎に進めることにしています。黒板には単に用語やポイントを書くだけでなく、基礎概念などはその定義の文章自体を書きます。高校での授業を彷彿とさせるかもしれません。しかし、これは学生諸君が自らの手でノートに「書く」という行為が理解を深めるうえで重要だという考えによるものです。また板書に際しては「黒板の空きスペースに適宜書く」というのではなく系統的に（上から下にそして左から右に）書くことをとりわけ重視しています。こうした授業を行うと、終了後には全身チョークの粉を浴びて教室を出る感じになります。なお、大学の授業でも今やスクリーン（パワーポイント）の活用が大流行していますが、私はそれを使わずあくまで板書主義を採っています（その理由は、http://www.okabem.com/essay/index.html に掲載の「最適授業メディア私論」をご参照）。

第３に、毎回 A4 用紙１枚の補助的資料を配付することです。これは講義内容のレジメではなく、関連する図表や統計を１回の講義につき４～５件（各種資料からの転載ないし自作の図表）を選んでそれらを１枚の用紙にまとめたものです。講義では、議論の根拠や統計的裏付けを示す必要がありますが、その板書時間を節約することがこの配布資料を作る主な目的です。むろん、こうしたコピーを随時配布することは誰でも行っていることですが、私の場合とくに２つの点に配慮しています。一つは用紙を A4 サイズ（それをタテに使用）で統一すること、それを毎回１

枚作ること、そしてそこに入れる図表はできるだけ見やすいものにすること（原資料を拡大あるいは縮小する、不要情報をそぎ落とすなど）です。もう一つは、資料の右上方に例えば「日本経済論（岡部・2009 秋）3」といった具合に授業名や通し番号を小さい活字で入れることです。この２つの配慮によって履修者は配布資料の整理と活用がしやすくなるからです。

第４に、学生との質疑応答を促進することです。米国の大学では、学生はこちらから質問をしなくとも講義中に挙手して積極的に質問してくるので格別の苦労はありませんが、日本の学生にはそういう態度があまりみられません。このため私は、学生が挙手して質問する場合であれ、私が質問して学生がそれに答える場合であれ、その学生には「ボーナス点を１点与える」というルールを設定し、それを学生に告知しています。このルールに従えば学期中、仮に 10 回挙手すれば成績が 10 点追加されるのでかなりの動機づけになるはずであり、現にその効果が認められます。ただ、それでもなお、もっと活発に質疑応答する場面が増えてもよいというのが正直な感想です。

こうした質疑応答は、授業担当者が講義内容を本当に深いところから理解できているかどうかが試される機会（場合によっては新しい研究テーマが示唆される機会）でもあります。私が米国で初めて教壇に立って企業金融について講義をしていた時に学生から質問を受けました――「いま説明のあった実務に合致したペッキング・オーダー（利用資金優先順位）理論は純粋理論において基本となっているモジリアーニ＝ミラーの理論命題とどういう関係にあるのか」と。私は絶句せざるをえませんでしたが、数日考えたうえでやっとこれにきちんと回答した次第です。この時「教えることは学ぶことである」ことを痛感しました。

第５に、授業の前日と当日の計２回、講義のリハーサルを行うことです。最初米国で（むろん英語で）授業を担当した頃は、自分の研究室で声を出してリハーサルを行っていたので１回の練習に 1 時間内外かかりました。しかし、その後は同一科目を繰り返すかたちになるので今では 20 分程度に短縮できています。ただ、それでも講義前日には講義ノートの手直しや配付資料の準備を全て終えるとともに第１回目のリハーサルをします。そして授業当日は講義ノートの最終的な黙読予習をして教室に出向くことにしています。

米国で最初に担当した授業（週２コマ）は概ね上記の方式で対応したため、自筆の講義ノートを約 500 枚も書く結果になりましたが、幸い履修者による授業評価では学部全科目平均をかなり上回る評点をもらうことができました。この経験を踏まえて私は、学部初級の授業であれ大学院の授業であれ、今ではすべて上記のやり方で臨んでいます。それ以外にも、例えば息抜きのための気のきいた挿話を毎回準備するなど、今なお改善を続けているところです。